

史跡

正家廃寺跡

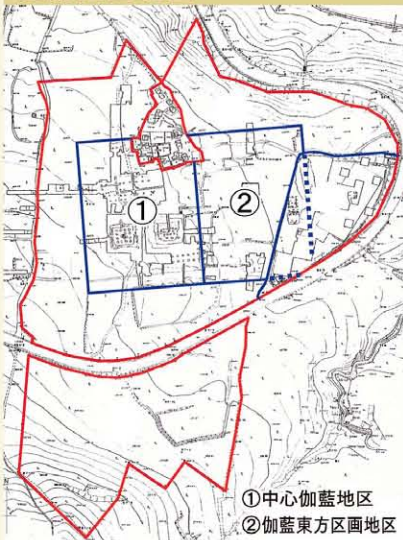
そこに立つと見えてくる
1100年前の恵奈の里

名称：正家廃寺跡（しょうげはいじあと）
所在地：岐阜県恵那市長島町字寺平
指定告示：2001年8月13日
指定面積：25,735.92㎡



イラスト：香川元太郎

史跡指定範囲



① 中心伽藍地区
② 伽藍東方区画地区

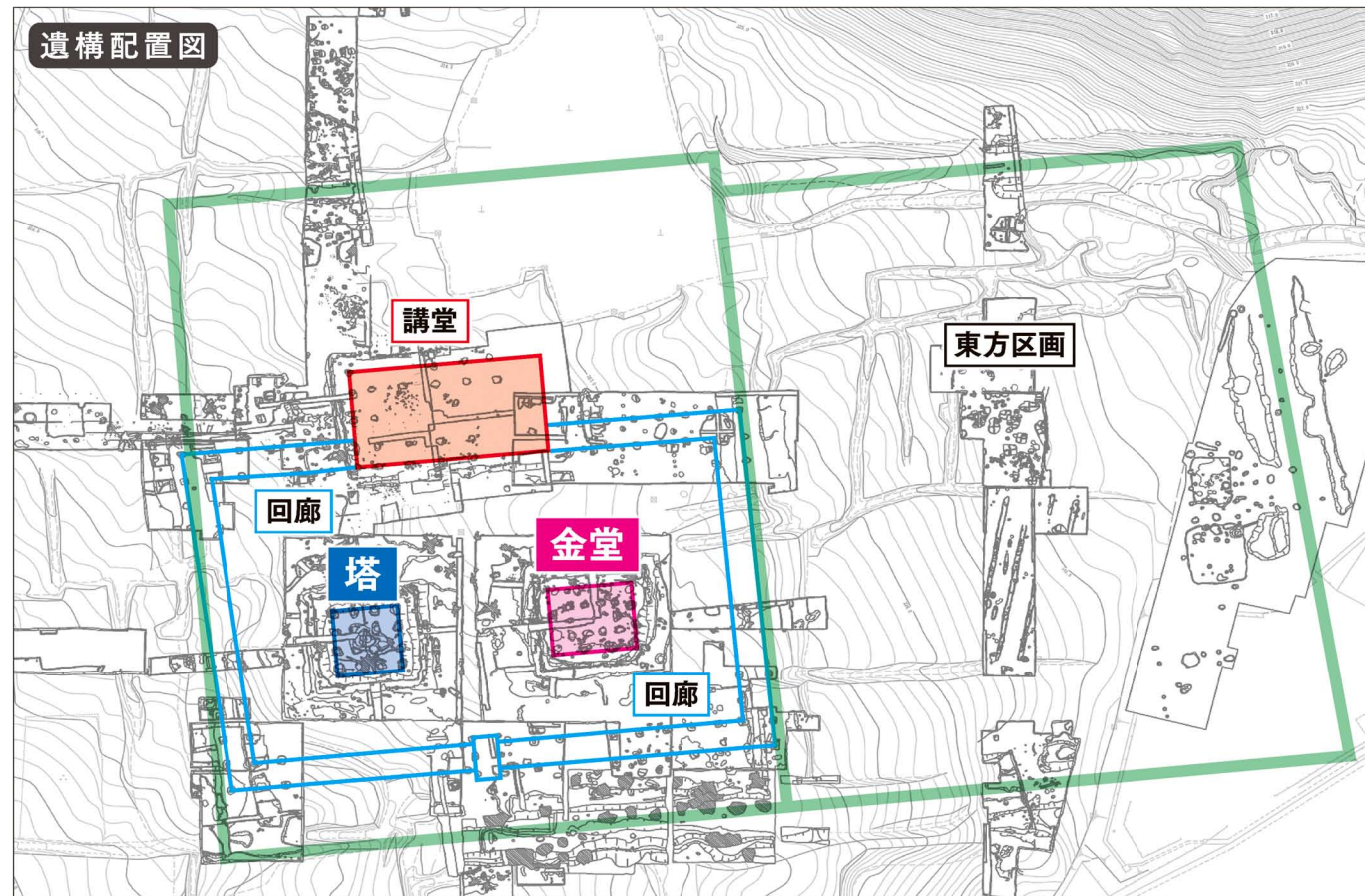


遺跡の変遷

正家廃寺跡は、恵那市長島町正家の市街地を一望にする丘陵上に立地する、奈良・平安時代の寺院跡です。昭和51年度から54年度まで、平成5年度から11年度までの2次にわたる発掘調査によって概要が明らかにされ、主要な堂塔跡の残り具合が極めて良好なことや、金堂が世界に類のない特異な構造であることなどが高く評価され、東海を代表する古代寺院として、2001年8月に国史跡に指定されました。

最終段階の正家廃寺跡は築地で囲まれた東西二つの区画からなっています。伽藍地（西側の区画）は東西53.7m・南北70.2mで、内部に主要伽藍を法隆寺式に配置しています。東方区画は東西53.7m・南北66mで、内部では掘立柱建物・竪穴建物が検出されており、寺院の維持管理にかかわる施設があったと推定されます。

遺跡の変遷は、築地の造営、主要堂塔の焼亡を画期として、3期に区分しています。



奈良時代前半の恵奈

正家廃寺跡は、8世紀前半に、東濃5市のエリアで最初に建立された古代寺院です。それまで寺院の空白地域であったこの地域で、正家廃寺はなぜ建てられたのでしょうか。

その手掛かりとなるのが、『続日本紀』にある美濃守笠朝臣麻呂の事績です。706年に美濃守に選任されてから14年の間に精力的に国内の整備を進めました。中でも不破関や神坂峠越の東山道の整備などが特筆されます。奈良時代の律令国家は、まだその支配が及んでいない東北地方の経営を本格化させており、東山道の難所で東国への入口となる神坂峠を控える恵奈郡の整備には特に力を入れたと推定されます。

ところで、この地域は西暦677年には土岐郡の一部で、恵奈郡の立郡はこの後の70年余りの間であったことが知られています。これも、こうした国家プロジェクトを推進していくためでしょう。

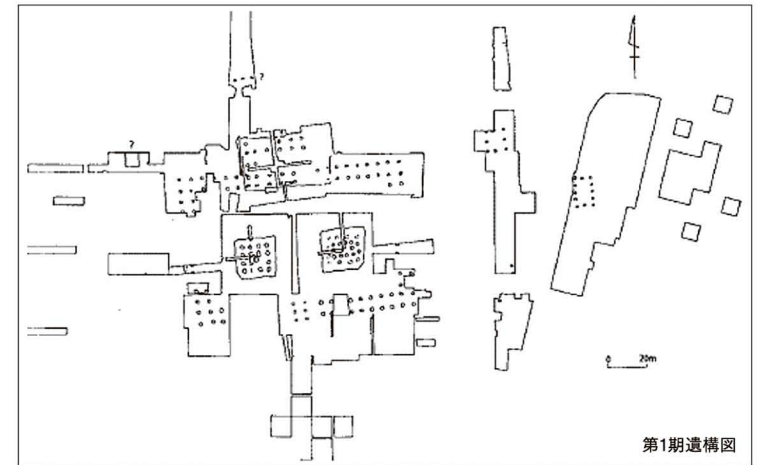
正家廃寺の造営もこれと軌を一にしており、新たに設けられた恵奈郡の内実を整えていく一環として進められたのでしょう。単なる郡の寺ではなく、東山道神坂峠の麓の寺院として、大井・坂本両駅とともに、国家にとって重要な役割を果たすことが期待された可能性があります。

第1期 | 8世紀中葉～8世紀末

主要伽藍が回廊で囲繞されていた時期。金堂・塔・講堂・回廊が設けられた。創建は、金堂基壇の完成時に埋められた須恵器から猿投窯岩崎25号窯式期（8世紀前半）と推定している。この時期の東方区画は明確ではない。



須恵器杯（金堂基壇周囲の落ち込み出土）



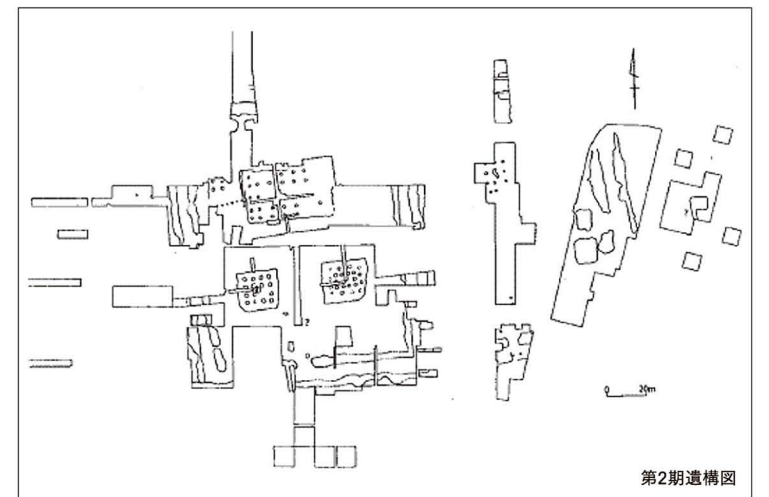
第1期遺構図

第2期 | 8世紀末～9世紀後半

回廊が撤去され築地が設けられてから主要堂塔が火災により焼失するまでの時期。東方区画が明確となる。築地の造営は、造成土内から出土した須恵器から、猿投窯折戸10号窯式期（8世紀末）。焼失は、火災堆積層から出土した灰釉陶器から、猿投窯黒笹90号窯式期後半（9世紀後半）である。



須恵器瓶（南辺築地出土）



第2期遺構図

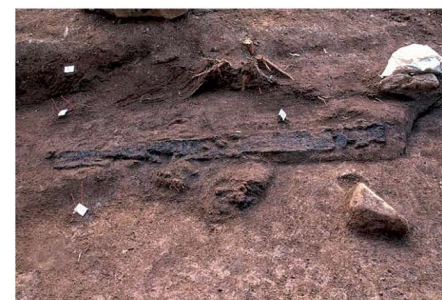
第3期 | 火災による衰退と廃絶



灰釉陶器小碗（塔跡火災堆積層出土）

金堂・塔・講堂基壇の周囲は大量の炭化物和鉄釘を含む層（火災堆積層）で覆われており、その状況から主要堂塔は火災により失われ、その後再建されなかったことが判明している。

なお、講堂跡では、火災堆積層の直上から折戸53号窯式期の灰釉陶器がまとまって出土しており、焼失後しばらくの間宗教的な活動が行われた可能性があり、第3期と位置付けている。



炭化した建築部材（金堂跡）



火災堆積層（塔跡）



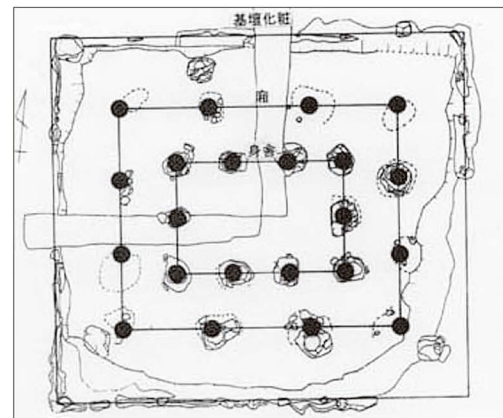
焼けた壁土（塔跡）



発掘中の金堂基壇（南西から）



発掘中の金堂基壇（真上から）



金堂平面図

金堂

基壇の大きさ

東西11.1m、南北9.9m、高さ1m～1.7m

基壇の構造

版築、基壇化粧は乱石積

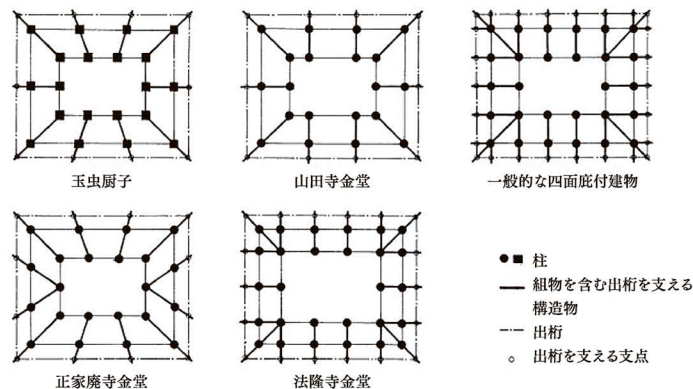
建物の構造

身舎の四面に廂がとりつく四面廂付建物。身舎は桁行3間、梁行2間、柱間は1.5m等間。廂は桁行、梁行ともに3間、柱間は桁行2.4m・2.7m・2.4m、梁行1.95m・2.1m・1.95m。身舎と廂の間隔は1.5m。柱の太さは直径0.45m

写真は、発掘途中の金堂基壇です。礎石が内側に10石、外側に12石並んでおり、放射状に広がっています。古代寺院の金堂建築は柱が基盤目状に配されているのが一般的です。このような平面の建物は、現存する古代建築にも、発掘遺構にもない、唯一の事例です。

古代建築の屋根は、内側と外側の柱をつなぐ水平の部材を建物の外まで張り出し軒を支える構造になっています。現存するお堂を見ると、柱の上端に屋根を支える組物が壁面に対して直角に張り出しているのが観察できますが、正家廃寺の場合にはこれが放射状（斜め）になっているということです。

よく似た事例が一つだけあります。玉虫厨子（法隆寺）です。この厨子は精緻に建築の外観を模した工芸品で、7世紀の寺院建築を考える上で貴重な資料です。これを見ると軒下の組物が放射状に広がっている様子がよく分かります。正家廃寺金堂の軒下もこれと同じ外観だったと推定されます。お堂の前に立ち建物を仰ぎ見ると、ここにしかない唯一無二の造形が強い印象を与えたことでしょう。



金堂平面模式図（他との比較）

奈良三彩

中国の唐三彩をまねて、透明・緑・褐色の三つの釉薬を施した焼き物。平城京近くの国家直営工房で少量が注文生産された焼き物で、地方では、国府や国分寺など中央とつながりのあるごく限られた遺跡からしか出土していない。

正家廃寺跡では伽藍地で短頸壺、東方区画で浄瓶（二彩）が出土している。



塔

基壇の大きさ

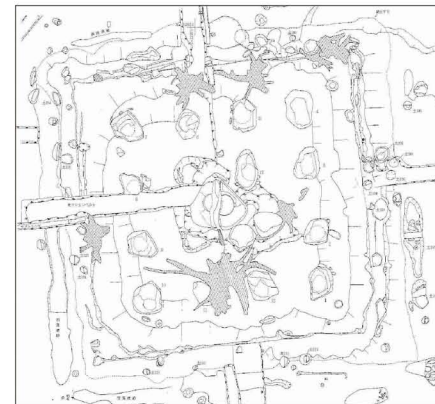
1辺10.2mの正方形。高さ0.7m～1.4m

基壇の構造

版築。基壇化粧は乱石積

建物の構造

心礎は地上式で中央に直径0.72mの円形の柱座がある。初層の規模は1辺6mで、柱間の寸法は中央間を広くとると2.1m、両端間が1.95mとなるが、2m三ツ割の等間隔である可能性もある。柱の太さは0.48m。軒の出は3m



塔平面図

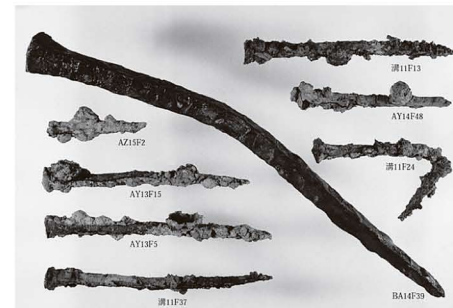
礎石は16石のうち側柱12石はすべて原位置を保っています。内側の四天柱4石は1石を除いて動かされています。心礎も二つに割れており、一つは動かされています。これは、心礎の周囲が掘り返されているためで、どうやら、心礎の下に埋められていることの多い仏舎利を取り出そうとしたようです。

塔の規模は、一辺6mの正方形で心柱の直径は72cmで、これから推定される塔の高さは約30mです。

基壇の周囲には、廃絶時の火災堆積層が厚く堆積しており、この中から鉄釘が400点以上出土しました。塔を飾った風鐸（写真上）と風招（写真中）も出土しています。全国で20例ほどしか出土例のない珍しい遺物です。また、直径6.5cmの鉄製円盤（写真下）が4点出土しています。用途は不明です。



発掘中の塔基壇



鉄釘



風鐸・風招・円盤

講堂

基壇の大きさ

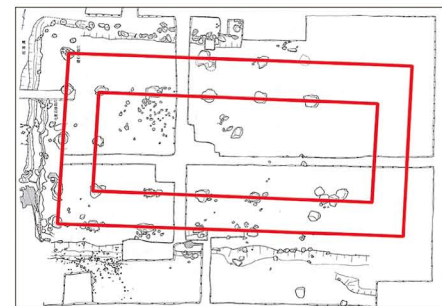
東西21.6m、南北12.6m、高さ0.25m

基壇の構造

西側では地山を削り出し、東側では盛り土により築かれる。版築・掘込地業の有無は未調査のため不明。基壇化粧は乱石積で、基壇上面に沿って1石が巡る

建物の構造

桁行7間、梁行4間の四面廂付建物。柱間は、身舎と廂の間が2.1m、他は3m



講堂平面図

昭和51年から始まった第1次発掘調査発掘調査のときに全面発掘され規模が判明しました。

基壇の高さは非常に低く、東辺は失われています。礎石は19石が原位置を保っています。金堂や塔と比べるとたくさんの須恵器・灰釉陶器が出土しており、お堂の性格の違いをうかがわせています。また奈良三彩も出土しています。



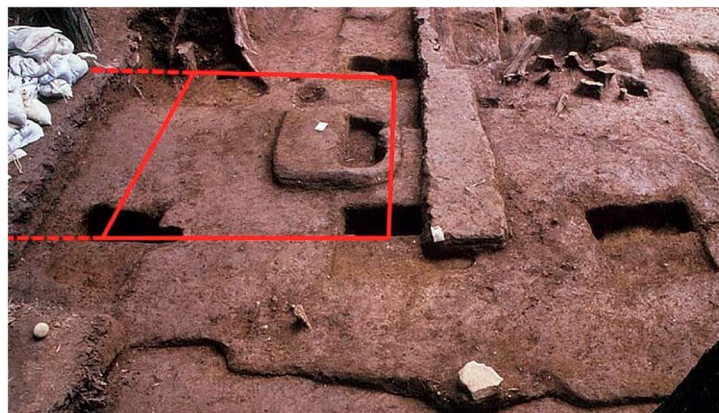
講堂（昭和51年～55年調査時）

経蔵

- 基壇の大きさ 不明
- 基壇の構造 2層の盛り土による。基壇化粧は不明
- 建物の構造 1間×1間または、2間×1間の掘立柱建物。柱痕及び抜き取り痕の直径は0.2～0.3m

講堂の西約10mの位置で検出された、盛り土の上に建てられた1間×1間の掘立柱建物で、北に1間延びる可能性があります。最低1回の建て替えが行われています。

位置から経蔵などに相当する建物である可能性があります。



経蔵基壇

回廊

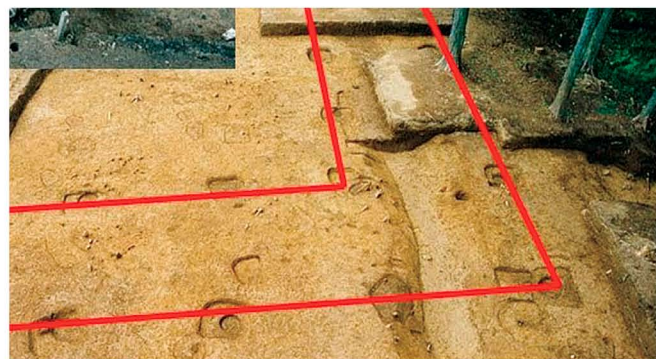


回廊北辺



回廊南西コーナー、中門

- 東西辺 桁行14間(柱間2.55m)・梁行1間(柱間2.7m)
- 南辺 中門の東側は桁行10間(柱間2.55m)・梁行1間(柱間2.7m)。西側は桁行9間(柱間2.55m)・梁行1間(柱間2.7m)
- 北辺 講堂の東側は桁行7間(柱間2.55m)・梁行1間(柱間2.85m)。西側は桁行6間(柱間2.55m)・梁行1間(柱間2.85m)
- 中門 桁行1間(柱間2.5m)・梁行2間(柱間2.0m)の掘立柱建物



回廊南東コーナー

金堂・塔を囲んで北辺は講堂にとりつく、東西53.6m・南北36.15mの単廊の回廊です。南辺の中軸線上に中門を設けています。講堂に取り付く柱を除き掘立柱で、基壇は検出されていません。回廊の幅は、柱間で東西南辺が2.7mなのに対し北辺は2.85mあり、講堂に取り付く北辺は一回り大きく造られています。また、南辺・北辺の桁行が東側の方が1間多いのは法隆寺式伽藍の特徴です。

築地

- 構造(北辺) 築地本体の基底部の幅は1.8mで、高さ0.15mが遺存し、版築は2層が観察された。本体の両側に幅0.6mの犬走りが設けられているが、1層の版築により平坦面を造成している。この両側に素掘りの側溝が設けられている。

伽藍地・東方区画をそれぞれ囲み、伽藍地東辺と東方区画西辺は共有しています。東・西・南辺は上部が削平されて側溝である2本の溝が検出されたのみですが、北辺では土塁状の高まりとして地表面で確認ができ、基底部が良好な状態で検出されました。規模は、側溝の間の平坦部の幅が南辺が3.5m、他の三辺が3mであることから、南辺のみ一回り大きいと推定されます。

側溝内からは崩落した築土がブロック状になって出土しており、特に西辺では遺存状況が良好です。



築地・伽藍地北辺



築地築土の出土状況

東方区画

第2期に明瞭となる築地で囲まれた区画です。北辺では先行する素掘りの溝が検出されており、第1期から寺域に含まれていた可能性があります。築地内側側溝は、東・南・北辺で、中軸線上に土橋状の掘り残しが検出されており、門があったと推定されます。

遺構は、東端で掘立柱建物1棟、竪穴建物2棟を検出したほか、中央部で柱穴とみられる土壌を検出しています。

遺物は豊富で、須恵器は水瓶や鉄鉢などの仏具のほか、坏や盤などがたくさん出土しました。内側に漆が付着した坏もありました。また、東辺築地側溝からは、鉄滓やふいごの羽口、炉壁など鍛冶関連の遺物が投棄された状態でまともに出土しました。こうしたことから、東方区画には鍛冶場や漆を用いる工房など寺院の維持管理のための施設が置かれ、多くの人が活発に活動していたことがうかがわれます。



平成4年度調査区全景



鍛冶炉の炉壁



ふいごの羽口



須恵器の瓶



漆付着須恵器



墨書須恵器

床板のある竪穴建物

伽藍地西辺築地から西へ5mのところで床板が敷かれた状態の竪穴建物が検出されました。時期は8世紀中葉です。一辺3.7mの隅丸方形で北にかまどを設けており、長さ3m・幅0.3mのヒノキの板を写真のように東西の壁に沿って4枚ずつ並べて床とし、中央を土間としています。竪穴建物で床があるのは珍しく、調査した時点で日本最古の出土事例でした。



❖ 大井宿 ❖

中山道46番目の宿場。6カ所の升形が特徴。本陣の門、ひし屋、明治天皇大井行在所などの建物が残る



❖ 武並神社本殿 ❖

永禄7年(1564)に完成した東美濃最古の神社建築。国重要文化財



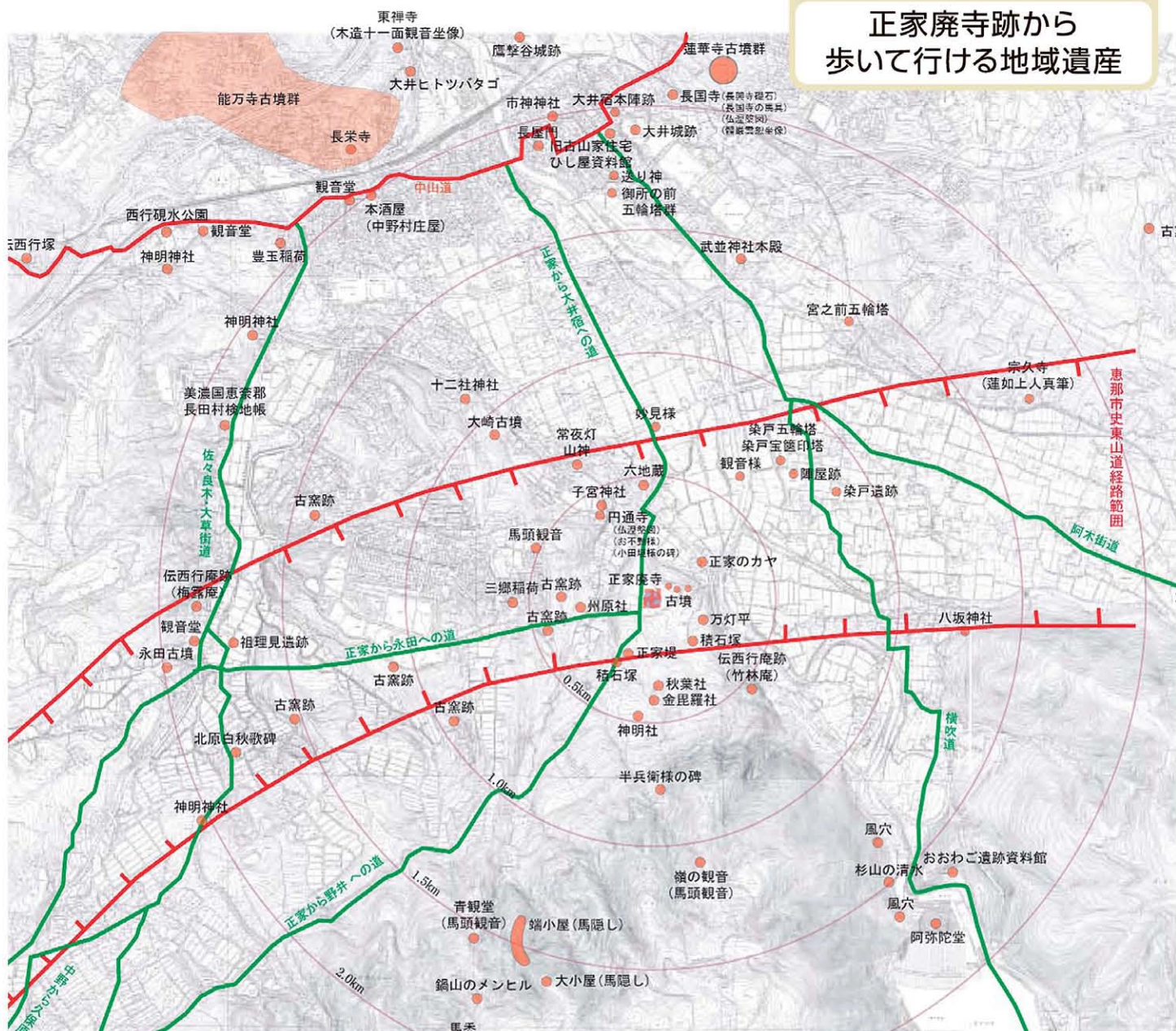
❖ 染戸五輪塔群 ❖

南北朝時代の律宗系大型五輪塔。市指定文化財



周辺ガイド

正家廃寺跡から
歩いて行ける地域遺産



❖ 馬隠し ❖

戦国時代の山城跡。大規模な堀切が見所



❖ 鍋山のメンヒル ❖

夏至の日の出には2本の石の間から太陽が昇る。市史跡



❖ 正家のカヤ ❖

目通りの周囲4mのカヤの大木。県天然記念物

